

# 風土



西王母  
神蔵器

風船の麥生を越えて初不動

笹子鳴く磨きほそりに柱かな

蕪村より母なつかしむ冬すみれ

足の爪手の爪切つて寒の明く

大寒や竹の根この地を走り

柱にさす金輪際の西王母

仏壇の奥の金色二月かな

水仙を生けて一日をつつしめり

大名にもなれぬ二月や句選び

雪こんこん座敷童<sup>わらし</sup>は手が込<sup>こ</sup>んで

レグホンの牡を驕れる良寛忌

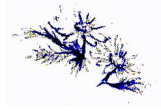
通夜

寒満月かへりに同じ角<sup>かど</sup>曲り



# 竹間集

同人作品



卒 寿

鈴木とおる

碌山館出てより綿虫日和かな  
夫婦連れの庭師来てゐる十二月  
潮騒の高まり来たり枯野道  
日向ぼこ声なきこゑに呼ばれけり  
南禅寺湯豆腐に旅しめくくる  
初日受く白黒の母カラーの妻  
ひとごとのやうな卒寿の四日かな

ひひらぎの花

外川 玲子

枯野ゆく眠れぬ枕うらがへす  
しづかなる影が集る寒月光  
削られて冬三日月の細さかな  
紙漉の水音洩るる連子窓  
ひひらぎの花に薄日のうつりけり  
不器用に生きて一輪冬すみれ  
忘れたきこと忘るるや寒の水

冬 薔 薇

山田 暢子

こゑ出して告ぐることなし冬薔薇  
枯田より枯田へ思ひつなぎゆく  
枯木立その一本は烏の木  
森で遇ふ男は梟かもしれず  
風冴ゆるここに出雲のさざれ石  
風といふ冷たきものよ爪木崎  
寒林のゆき止まるまで来て戻る

冬 茜

門伝 史会

十二月高僧の筆「変」一字  
人逝きし冬青空の深さかな  
頑なに一子相伝花枝  
湯の渡る音の静けさ櫓火かな  
幻住庵触れて冷たき椎拾ふ  
片寄りて落雁ならぬ浮寝鳥  
浮御堂影絵となりぬ冬茜

「淡交」以後(三)

野沢しの武

夏神楽句仲間に肩叩かるる  
茅一茎押しただきて茅の輪去る  
新聞に運勢欄や半夏生  
作句者の知れて愉しきじんべの句  
瓜を揉む妻に精密検査の報  
短夜をぞんぶん使ひ手紙書く  
明易を来たる朝刊手渡さる

冬の月

鈴木 石花

版元へ句稿持込む年の暮  
付け睫にシャンソン歌ふ忘年会  
拍手して胸熱き帰路冬の月  
二人して喜寿となる年初日拝  
姉の忌の一月二日母郷の温泉  
三日はや手足を伸ばす常の宿  
住井す糸の衣畳紙より初句会

ナザレ人

山路 紀子

学習院皇族寮や冬桜  
掘炬燵乃木院長の一間かな  
冬麗やステンドグラスにナザレ人  
教会に藁の厩やクリスマス  
児と枕並べて眠る霜夜かな  
畳屋に青き香りや十二月  
笹鮎の笹すぐ乾く漱石忌

浅き春

一代田 青鳥一

とどまれば浪畳みくる島二月  
春浅き空港にある風見鶏  
断層のバームクーヘン鳥雲に  
如月の筆島尖りゐたりけり  
遠富士もひかりて雪の三原山  
クルス立つ急勾配に野梅かな  
踊り子の里春まだき海の色  
食堂にカラーグラビア春暖炉  
水漬や吹けば膨らむ粥の膜  
御神火の島焼酎や浅き春

# 山河集

同人作品



神蔵器選

手袋の十指に分かつぬくみかな  
処方箋に七種の薬師走かな  
狐火の浮く一ツ川二ツ川  
般若面右も左も冬ざるる  
明日といふ二〇〇九年大晦日

中村 洋子

定刻に電車走らせ山眠る  
けものみち交はるところ冬日さす  
マスクしてわが息深くありにけり  
泣くほどに笑ひしあとの冬銀河  
男坂 ゆく一団の冬帽子

柿沼 盟子

母の顔見に行く勤労感謝の日  
着ぶくれて水栓止むを忘れけり  
井戸水に洗ふ大根笑ひけり

安永 圭子

普段着の神主走る漱石忌  
父亡くて十二月過ぐ早さかな

仙田 孝子

雨となる師走のチャリテイコンサート  
イヴの灯のアカペラ混声四重唱  
茅葺きの大屋根燻らす櫓を焚く  
花活けて床定まりぬ去年今年  
同郷の友より文添へ年越蕎麦

豎山 道助

枯木星神は一人にて足りる  
身の内に鋼三片十二月  
みちのくの枯野はじまる上野駅  
柚子湯してまた新しき月日かな  
点眼の終の一滴冬怒濤

◇特別作品◇(抄)

## 小原村

大森 尚子

山眠る夢はおぼろに四季桜  
花びらは落ち葉の船に座してをり  
冬天に淡き昼月四季桜  
冬の雲四季桜恋ふ小原村  
空堀に有象無象の冴え動く  
寒雀末広がり飛びたてり  
山茶花や墓の久女も句を拾ふ  
冬鶯句碑の久女と何語る  
俳人久女の人生模様山茶花散る  
冬天に久女の冴よみがへる



# 風土独語／神蔵器



狐火の浮く一ツ川二ツ川

中村 洋子

狐火はやよひ句会の席題であった。私の子供の頃は、まだ土葬であったので雨の夜など新仏の墓のこんもりと盛り上げた土まんじゅうの上に、狐火が燃えていたとか、人魂が飛んだとかいいう話は間々聞いている。しかし、私自身は狐火も狐の嫁入りの行列も見ることがない。

ところで掲出句は「狐火の浮く」とかなり具体的に把握している。おそらく水の上の狐火は燐火というより、朽ち葉などに湧く発光バクテリアを尾羽につけた雛子や山鳥、あるいは水鳥が水面を飛んでいたのではなからうか。

さてこの句では「一ツ川二ツ川」の把握、表現が見事である。勿論、「一ツ川二ツ川」は実存するものであればそれに越したことはないのであるが、実存する川をここにおくと、本物の狐火がかえって霞み、嘘になる。もともと幻想の中のもの、虚にいて実、幻想の中の真実を演出した。「一ツ川二ツ川」は、合わせて三ツの川、つまり亡者が冥土へ行く途中にあるという三途の川である。これは生前の業によって渡る流水の速さの違う三つ瀬であり、川のとりに姥と翁の鬼が居て、亡者の衣を奪ったりして通行を妨害した。亡者にとってはどうしても通らなければならぬ難所

である。

余談になるが、私の実家の鶴川村では、葬儀の来会者に赤飯を供する風習がある。「葬儀に赤飯」と疑問に思われる方もあるが、これは死者の息子や嫁いだ娘の家から、大飯台一荷の赤飯が届けられるもので、本来の目的は三途の川の鬼などへの付け届けで、死者が無事にあの世に行けるための袖の下であるとか。

狐火の句は案外多いが、掲出句も新しい代表作の一つとなるであらう。

定刻に電車走らせ山眠る

柿沼 盟子

電車はたぶんローカル線、すでに枯れ尽しで、暖かい日がいっぱいに当って、静かに眠りに入っている山を、半円を画くように走り、しかもいつも間違いない定刻に走っている。平和で幸せな光景である。

しかし、あまりにも幸せに見える風景だからであらうか、やがてせつなく悲しくなってくる。石を打って火を作り、弓矢を持って狩をしていた時代と、今日の文明社会と人間の幸せについてだけを言ったらどちらが幸福であらうか。(以下略)

# 風土集



## 神蔵 器選

鮫鯨を吊つて市場のかがやきぬ 高槻

浅田 光代

小面をそのまま莫塵に年の市

鳥の羽根閉ぢ込めてゐる氷かな

白障子開けて茂吉の山河かな

マスクして天地のすこし端にゐる

癌の妻と十有余年毛糸編む

釘を抜く音の曲りて十二月

上り来て寒満月の座に坐る

十二月八日雨垂れ打ちにけり

冬星の軽くなるまで吹きにけり

自分のもの買はぬつれあひ十二月

初霜や囲ひし葱の上の土

訃報多し十一月のフアクシミリ

漱石忌三四郎池の師弟句碑

だからだと歯医者に通ふ木の葉髪

川崎

遠藤逍遙子

上尾

根岸 善行

ターナーの日暮れとなりし小春かな 横浜

近藤幸三郎

持ち駒を使ひ果して懐手

敦盛の膝つくさまや枯はちす

恋人の丘を横目に綿帽子

山神は眠りに就けり斧仕舞ふ

「舟弁慶」果つ松濤町冬満月

極月の女人の消ゆる懺悔室

黒手套にぎり面会室に入る

数へ日の厨に砥石沈めをり

キヤンドルや氷の上の的矢牡蛎

子が鳴いて「羊その三」聖夜劇

賞罰なし肩書なしや木の葉髪

ゆく道のいつかひとりに冬の鷺

ふんだんに日差しのあるて懐手

咲きついで明日をつなぐシクラメン

東京

川田 好子

東京

林 いつみ